Osaka University Knowledge Archive

Title	セント・マイケルズ・カレッジの計画と実施 : 1850年代のカナダにおける「ピクチャレスク」の一形態
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	日本建築学会近畿支部計画系研究報告集. 1986, 26, p. 769-772
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26610
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Architectural Institute of Japan

9023

61年度
日本建築学会 近畿支部
研 究 報 告 集

セント・マイケルズ・カレッジの計画と実施
― 1850年代のカナダにおける「ピクチャレスク」の一形態 ―

正会員 藤 田 治 彦

都市計画基準線からの逸脱

オンタリオ湖北岸に沿って碁盤の目を有するトロント市の都市計画は、同市が未だヨーク（またはダブリン）タウンシップと呼ばれていた18世紀末に設定された湖岸の基線および隣接するスカボロ（別名グラスゴー）タウンシップとの東側境界線を基準としている。ヨークの基線は、湖に沿って東側に続く他の10のタウンシップの基線と共に、1791年の測量によって決定された。その測量は当時の英領アッパー・カナダをそれらの基線に沿って等距離に分割するための極めて機械的なものだったが、ヨークの基線は全体として実際の湖岸線にほぼ平行であったために、それを基準とした都市計画グリッドには大きな変更が加えられることなく、19世紀前半には現在のトロント市の碁盤の目が概略できあがることになる。

この整然とした直交グリッドに従ってトロントの建設が進められたが、グリッド確立以後、19世紀の中頃までにヨーク綜合病院(1820)、地磁気観測所(1840)、そしてセント・マイケルズ・カレッジ(1856)の３つの公共的施設がグリッドの方向を無視して建てられた。そのグリッドは東西南北ではなく湖岸線を一応の基準としているので、観測のために南北の方向をとる地磁気観測所はグリッドから外れざるを得ない。綜合病院の場合は、医師のひとりがグリッドを無視して東西南北に壁面を向けて建設するように主張している。[1] 建築的妥当性は別として、両施設は科学的な理由で都市計画グリッドに建物の向きを合わせなかった。それに対して、昨年報告したキングズ・カレッジ計画から20世紀に至るまで都市計画グリッドに従ってきたトロントの学校建築の歴史の中で、セント・マイケルズ・カレッジのオリエンテーションは美的理由で都市計画グリッドから逸脱した可能性の高い、北米建築史上興味深い例であり、その基本計画と実施の経緯を史料により確認し、その歴史的意義と限界とを明らかにする。[2]

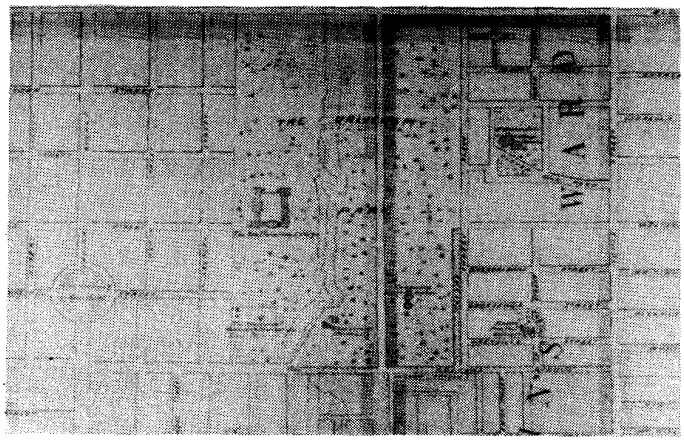

Fig. 1 Queen's Park and its Environs, Plan of the City of Toronto (Fleming, Ridout + Schreiber's map), 1857. (City Archives)

セント・マイケルズ・カレッジ　基本計画

現存するトロント大学最古の建物であるセント・マイケルズ・カレッジ旧校舎は、1852年にその母体ができ、翌年に設立された同カレッジが、当時クローバー・ヒルと呼ばれていた現在のクイーンズ・パーク北東部に敷地を獲得して、セント・バジル教会を含む形で1855年に建設が開始されたものである(Fig. 1)。

ウィリアム・ヘイ(William Hay, 1818－1888) による基本設計は、既に基礎工事開始後１ケ月以上を経た1855年に８月16日の Catholic Citizen に初めて公開された。その敷地は、東西をチャペル・ストリートと小路とに挟まれ約300フィートの幅を持ち、南北はセント・ジョセフとセント・メアリのふたつのストリートの間に約530フィートの奥行きを有するが、セント・ジョセフ・ストリートは当時、南東から北西へ敷地の南西角を切って斜めに走っていた。セント・マイケルズ・カレッジは、その斜行するセント・ジョセフ・ストリートに、その角を直かに接するような特異な平面で提案されている。それは一種の方庭(Quadrangle)形

ST.MICHAEL'S COLLEGE AND ST.BASIL'S CHURCH, 1855
-William Hay's "Picturesque Constructive"Design-

FUJITA, Haruhiko

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

式だが、中庭を囲む回廊や教室そして教会の壁が、南側を走るセント・ジョセフ・ストリートに対して、何れも平行に納まらないために、特定の平面、いわゆるファサードを持たない設計となっている(Figs. 3,4)。

セント・マイケルズ・カレッジ　実施と変更

1855年9月16日に定礎式が行なわれ、同年11月3日のBuilder 誌には「その様式はカナダでは目新しい」と紹介されている。[3]　翌1856年8月11日には地元紙Globeに工事の進行状況を伝える記事が掲載された。

この建物はセント・バジルのローマン・カソリック協会によって建設されている。その形は不規則な方庭形式で、250フィート×200フィートの規模である。135フィート×60フィートの教会は四辺形の北西角に、幾つかの教室は北側と東側を占め、広々とした食堂も含まれている。南東角には大きな講堂があり、その前面には低い回廊が方庭を巡っている。調理室と用務員室は背後にある。教会の一部と方庭を囲む一面が概ね出来上がり、その建設費は約6000ポンドである。スナル、ウォールシュ両氏が煉瓦工事と木工事を請負っている。[4]

同1856年9月14日にはセント・バジル教会で最初の礼拝が行なわれ、翌日にはセント・マイケルズ・カレッジも開校されたが、その後2年が経過してもヘイの基本設計は完全には実施されなかった。　当時のトロントの主要建造物に関する詳細な記述を含む The Handbook of Toronto(1858) にはヘイ自身あるいはヘイの関係者によると思われる次のような解説が見られる。

セント・マイケルズ・カレッジ全体の完成時には、200名の学徒を受け入れられるように考えてある。既に建設された主要部は、長さ90、幅40フィートで、高さは48フィート、その西側には長さ100、幅50フィートの教会がある。(中略) 建造物群は昔の英国のカレッジの形式に倣って方庭の形に配される。教会が四辺形の一辺を占め、身廊と側廊、そして突出した内陣とその両側のチャペルからなる。その宗教建築の様式は厳粛なファースト・ポインテド、または13世紀中頃の英国で普及したものである。(中略) 配置の適切さと便利さを考え、学校関係の建物は四辺形の他方に集めた。　それらはおもに教室、共用室、食堂、寄宿寮、そして院長と教師たちの個室から成り、用務員たちの住居を伴う。不規則な敷地境界線は、その中庭形式の建物群の中では比較的に開放的な部分の構成に、極めて心地よくピクチャレスクな構築的趣きを与える機会を建築家に授けた。[5]

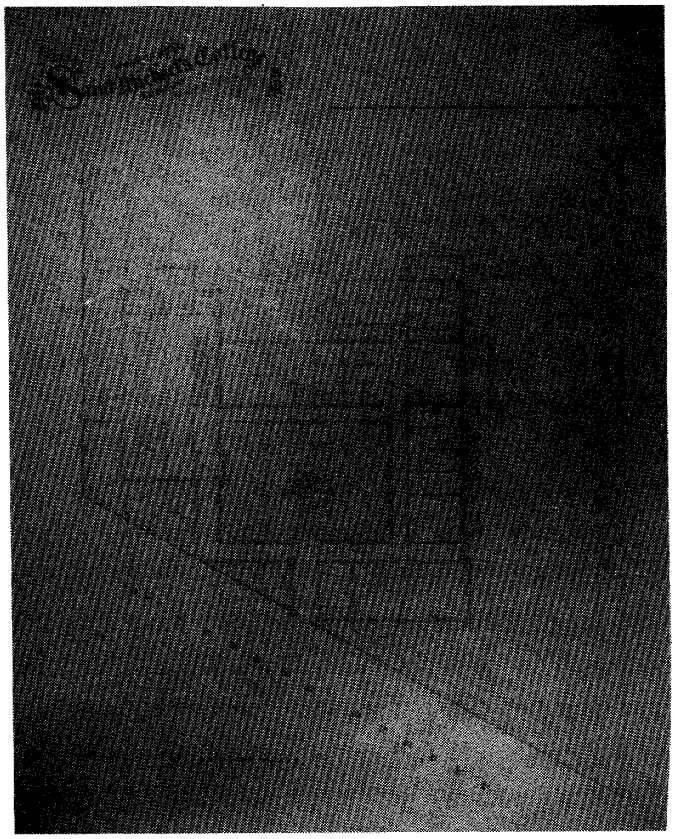

Fig. 2　William Hay, Ground Plan of St.Michael's College, Toronto, 1855.
(Metropolitan Toronto Library Board)

この記述は、Globe 紙が工事の進捗状況を伝えた1856年から1858年までの間に教会とその側面から東へ伸びた学校の一部のみが作られ、教会と平行になる東側の棟は未だ建設されていなかったことを示す。しかも教会でさえ規模は縮小されている。ただ、1855年案は未だ基本的には保たれ、不規則な敷地の形を積極的に平面計画に取り入れ、装飾的手法によるのではなく、構築的または建築的事実によって一種のピクチャレスク性を実現しようと考えていたことは注目に値する。

しかし、このような文書には表われないものの、セント・マイケルズ・カレッジは経済的理由により規模が縮小されただけではなく、そのオリエンテーションまでも変更されて建てられていた。同じ1858年に出版された Atlas of the City of Toronto には、未完成

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

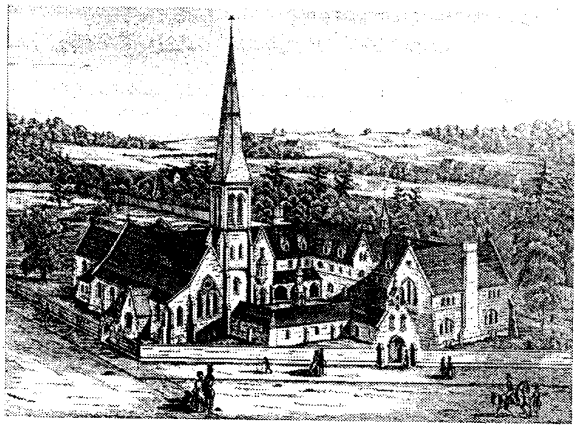

Fig. 3 Willam Hay, South West Prospect of St. Basil's Church and St.Michael's College, Toronto, 1855. (St.Michael's College)

のカレッジの平面が原案よりも時計廻りに10数度回転した形で示されている。[6] また、既に1857年に出されていた Plan of the City of Toronto には、原案より約20度も回転した平面が描かれていた(Fig. 1)。

この平面の回転にはおもに3つの理由が考えられる。第1に、当時トロント市が提案していた、敷地の北側を斜めに切って通るセント・クレメントという小路を避けて、それに建物を沿わせようとしたかも知れない。第2に、平面図には表われていない敷地の高低差などのために、現場を詳しく検討して、建物が適応すべく変更したかも知れない。そして第3に、以上のように具体的な、基本計画実施への物理的障壁が無くとも、1855年案に見られる、特定のファサードを持たない、建築的事実のみによるピクチャレスクの実現という造形思想を更に徹底し、どの壁面も周辺道路に平行ではない建物を構想したかも知れない。[7] 恐らく実際の理由は、その何れかひとつではなく、それらの組み合わせに財政難による計画の縮小等の理由が加わったものであろう。何れにせよ、セント・クレメント・レインを通す計画は中止となり、南側のセント・ジョセフ・ストリートもクローバー・ヒル・ロードと名を変え形を変えたが、セント・マイケルズ・カレッジは決して都市計画グリッドに沿うことなく現在に至っている。

設計者ウィリアム・ヘイの思想　「フロント」批判

1818年にスコットランドで生まれたヘイは、一時エディンバラで働いた後、ゴシック・リヴァイヴァルの代表的建築家であるジョージ・ギルバート・スコット(George Gilbert Scott, 1811－1878)の仕事に関係することになる。1847年にヘイは英国政府によりニューファウンドランドのセント・ジョンズに派遣されるがそれは当地やノヴァスコシアのハリファクスに彼自身が政府関係施設を建てるためである以上に、スコットが設計した英国国教会の大聖室の建設を監督するためであった。ヘイは一時スコットランドへ帰国した後、1853年にトロントで仕事を始め、トロントの新綜合病院(1855)、ゴウルド・ストリート・プレスビテリアン教会(1855)、ハウス・オブ・プロヴィデンス(1855)などを設計し、セント・マイケルズ・カレッジは、トロントでの大きな仕事の中では4番目のものであった。

仕事の規模ではヘイよりも6年はやくロンドンから来て定着していたカンバーランド (Frederic William Cumberland, 1820－1881)を凌ぐことはなかったが、実業家的側面が強く、建築論などを残すことはなかったカンバーランドに比べ、ヘイはトロント到着のその年から地元誌に建築論考を寄稿するなど、カナダの建築界に知的な刺激を与えた人物でもあった。

ヘイはスコットと同様にピュージン (A.W.N.Pugin, 1812－1852)の信奉者であり、ピュージン死去の翌年にトロントへ来た彼は、早速 Anglo-American Magazine に "The Late Mr. Pugin and the Revival of Christian Architecture" を執筆している。そこでヘイはゴシック建築とその他の建築とを歴史的に比較し、ゴシック研究とゴシック・リヴァイヴァルの歴史に言及し、ピュージンの経歴と思想とについて語った。ピュージンの思想を、材料の適切な使用、あらゆる建築的虚偽の排除、見せ掛けの効果のための装飾の拒否、そして全体的な合理性の追及として説明した後、ヘイはピュージンの技術を賞賛し、ピュージンの趣味から最近作にまで触れるなど、その知識の幅広さを示している。[8] "The Late Mr.Pugin"が基本的にはピュージンの建築論の紹介であったのに対し、同じAnglo-American Magazine に続いて執筆した "Architecture for the Meridian of Canada" は彼自身の言葉で語ろうとした建築論であった。この論説は例外的に早い「カナダ建築論」でもある。そこに含まれる合理性の要請は、建築における「フロント」の概念の批判に至り、セント・

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

マイケルズ・カレッジの基本設計との関係において興味深い。

ヘイは「有用性と真実性が建築の基本的原理であり唯一の真の審美規範をなす」と考える。実際の支柱を隠すガラス製の店舗の「フロント」などは、不安の念を生じさせ、観る者に不快感を与えるとヘイは説く。

人目をひくためにすべての装飾を建物の一部に集中させるショップ・フロントの原理には、実に穏当さを無視するものがある。まるで本当の彫刻のごとく目も眩むほどに豊かさを誇示する素晴しい「フロント」は、角を曲がって、それが見苦しい煉瓦に貼り付いた薄いベニアの建築だと解った時、その壮麗さの多くを失う。 華麗なる内部への如何なる期待も、かような建物の壁の間を垣間見れば、霧散消失してしまう。「フロント」が余剰資金を食い、必ず建物の内部を荒れ果てたままにするようになる。 (中略) 我々が現在のフロントのために参照する建物を作った古え人は「外側の庭」より先に「内部の大広間」を飾ることを考えた。彼らの建造物の外観は内部の壮麗さの微かなしるしに過ぎない。彼らの語彙に「フロント」などという言葉は無かったのだ。[9]

こう語るヘイにとって、カナダが参考にすべきものは急勾配の屋根と比較的に深い軒端を持ち、カナダの気候にも適すると彼が考える"Old English"であり、カナダとイギリスの建築が共に参考にすべきものは材料と構造とが正直に外部に表われた中世ヨーロッパの木造建築であり、全体的な、そして閉鎖的な整合性という、新大陸にとっては超越的な原理であった。この論法はピュージンの The True Principles of Pointed or Christian Architecture (1841) を想起させる。

古えの建物のピクチャレスクな趣きは、昔の建設者たちが現場での構築上の困難を克服するために用いた独創的方法の結果である。一方、主要な観面をピクチャレスクに仕上げた建物は、まさに人口の滝や岩にも似て、あまりにも不自然に自然であろうとしているので、じつに馬鹿げたものに見える。[10]

セント・マイケルズ・カレッジの「ピクチャレスクな構築的趣き」は、ピュージン自身による設計の何れにも劣らぬ程に、合理的あるいは技術的正当化を伴った「ピクチャレスク」を実現しようとするものだった。[11] しかし、敷地との関係を特別な形で考慮したこの建物も、都市化するトロントの種々の変化の中で、不自然な状況に置かれることになる。その云ゆる無用な装飾や「フロント」を排した自然さは、むしろ、前面道路への極めて局所的な自然さであった。ヘイの「フロント」批判は、結果的には、1859年に竣工する折衷主義的なユニヴァーシティ・カレッジに対する警鐘ともなる新鮮な発言ではあったが、独自の文脈を有するであろう「フロント」にまで構築物の一部としての整合性を、しかも結局は個人的な好みでしかない特定様式の構築物の一部としての整合性を要求する論議は、ヘイの、そしてピュージンの建築思想の限界でもあった。[12]

1. W.G.Cosbie, The Toronto General Hospital, 1819－1965: A Chronicle, Toronto, 1975.
2. キングズ・カレッジ以来の古典的プランニングの伝統に関しては、 拙論「ユニヴァーシティ・カレッジ以前のトロント大学」、 昭和60年度日本建築学会近畿支部研究報告集(計画系)、821-824 参照。
3. トロント大学 Douglas Richardson 教授提供資料。
4. オンタリオ社会開発事務局Steve Otto氏提供資料。
5. G.P.Ure, The hand-book of Toronto; containing its climate,..., Toronto, 1858, 263-264.
6. W.S.Boulton, Atlas of the City of Toronto, 1858. (Toronto City Archives)
7. この種のプランは極めて稀だが、 構想としては、J.C.Loudon の Encyclopedia(1833) などにある。
8. W.Hay, "The Late Mr.Pugin and the Revival of Christian Architecture," Anglo-American Magazine, II, Toronto, 1853(January-June), 70-73.
9. W.Hay, "Architecture for the Meridian of Canada," Anglo-American Magazine, II, Toronto, 1853, 253-255. 「 」内は原文ではイタリック体。
10. A.W.N.Pugin, The True Principles of Pointed or Christian Architecture, London, 1841, 71.
11. 拙論「機能主義とピクチャレスク」、人文(京都工芸繊維大学工芸学部研究報告)第34号、89-113 参照。
12. ユニヴァーシティ・カレッジ等の連合論的解釈は、拙論「モダニズムと人間像」、建築の研究、第50号、東京、1985、5-9 に試みている。

(京都工芸繊維大学助手・学博)

NII-Electronic Library Service